

巻頭言

「説教、コミュニケーション& トランスフォーメーション」

内田和彦

今号の『福音主義神学』は、昨年（2011年）の秋、東京は駒込の中央聖書神学校を会場に開かれた第十三回日本福音主義神学会全国研究会議における講演を中心に編集されている。筆者は、この会議開催の責任者として、全国研究会議の三十年に渡る研鑽の跡を振り返り、「説教、コミュニケーション&トランスフォーメーション」というテーマで開かれた今会議の概要と意義について、少しばかり述べたいと思う。合わせて、内容豊かな諸講演に対する筆者自身の応答として、閉会礼拝において語った短い説教を再録し、巻頭言に換えさせていただきたい。

1. これまでの全国研究会議と今回の企図

1970年に設立された日本福音主義神学会は、西部、中部、東部の三部会に別れて活動していたが、全国の会員が共に研鑽する場も必要との認識から、三部会が一同に会して神学研究会議を開くことになった。1981年、紅葉の美しい京都で開かれた第一回会議のテーマは「日本宣教の神学的再考、二十一世紀の宣教論をめぐる」であった。筆者も若輩ながら発題者の末席を汚すことになり、新約神学の観点から、宣教の前提としての「派遣」の概念の重要性について研究発表をさせていただいた。

以来会議はほぼ二年おきに開催され、講演の多くは学会誌に掲載されて来た。取り上げられた主題は、「今日における福音主義聖書論」(第二回、1983年)、「福

音主義の聖書解釈と説教(第三回、1985年)、「福音と文化」(第四回、1987年)、「福音の光のもとに見る日本文化」(第五回、1989年)、「聖霊」(第六回、1991年)、「『戦後昭和』史と日本の教会」(第七回、1994年)、「今日の宗教混乱と宣教の責務、真の宗教性の回復のために」(第八回、1996年)、「聖書釈義の今日的課題」(第九回、1998年)といったものであった。

一瞥してわかるように、福音主義神学のアイデンティティを問う聖書論、聖書釈義、聖書解釈といった課題との取り組みが一つの焦点であるとすれば、日本の福音主義キリスト教が、置かれている国、社会、文化、時代に対する自身の有効性、妥当性を検証しようとする企てがもう一つの焦点となっている。オウム真理教事件がもたらした宗教不信に対応しなければならないという危機感のにじむ第八回会議は、後者の典型であろう。

世紀が改まり、2002年に神戸で開かれた第十回会議において「福音主義神学における牧会」というテーマが設定された後は、どちらかと言えば後者の関心を中心となって来た。開催は三年に一度となり、2005年、名古屋での第十回会議は「霊性」、2008年、神戸での第十回会議は「現代日本における伝道の神学」、そして、今回東京で開かれた第十回会議は「説教、コミュニケーション&トランスフォーメーション」というテーマに導かれた。

「説教」をテーマとしたのは、今回が初めてではない。第三回会議、そして第九回会議においても、聖書釈義の到達点としての説教のあり方が議論された。しかし、そこでの主要な関心は、聖書のテキストからいかにして説教が生み出されるかであった。今回は、(それと切り離せるものではないが)それとは異なり、生み出された説教が、いかにして聞く者たちに相応しく伝達され、真の変革が生じるかを問うものである。説教の内容が、福音の真理を正しく豊かに証するものでなければならないことは論を待たないが、同時に会衆に有効に伝達され、神のみこころにそった変革をもたらすものでなければ、目的を果たすことにはならない。相対主義、多元主義のポスト近代、しかもバーチャルな世界が広がり、IT革命によってコミュニケーションの方法が著しく変化しているこの時代の日本にあって、いよいよハードルが高くなっていると思われるこの神学的課題に挑んだのが、今回の研究会議であった。

会議の大枠は、まず日本における説教の営みがどのようになされてきたかを歴史的に振り返り、その後に「何を」「誰に」「どのように」ということを改め

て問うものであった。失礼を顧みず、内容豊かな講演を僅かな言葉に纏める無謀を冒すなら、全体会議の講演は以下の様なものであった。基調講演、「福音主義教会における説教—何を、誰に、どのように語ってきたのか—」で、山口陽一氏は明治初期から今日に至るまでの日本のすぐれた説教者たちの説教の特徴を概観した上で、今日においても、すべての人に福音を語る責任を改めて自覚し、コミュニケーション能力を磨くようにと説教者たちに訴えた。これに回答して正木牧人氏は、福音主義キリスト教のこれまでの営みを分析し、受肉のキリストご自身が今ここで語っておられるものとしての説教を課題として提示した。「何を語るのか」は、堀肇氏と相馬伸郎氏で、その内容は「神の慰めを告げる牧会的説教を—現代人の霊的ニーズに応えるために—」「愛の手紙としての説教、そして教会」というタイトルによく要約されている。「誰に語るのか」は、安村仁志氏による伝達行為の多面的な分析と、大和昌平氏による日本における説教の歴史(仏教とキリスト教)の考察であった。最後の、「どのように語るのか」では、藤原導夫氏が「証言の輝きを取り戻す」必要性を訴え、鷹取裕成氏が説教者と聴衆の間のギャップを埋める具体的な方策を論じた。

また、これとは別に、五つの分科会(ワークショップ)で、今日の説教者に必要ないし有益と思われる幾つかのテーマが取り上げられた。「テクノロジーと説教」は船津信成氏の担当で、最先端の技術を説教にどのように生かせるか、具体的な提起がなされた。分科会「国民性と説教」は二つあり、異文化から日本にアプローチする説教者、モニカ・ブルッテル氏と趙南洙氏が、それぞれの洞察を「魅力的と効果的なコミュニケーション・スキル」「聞かせる説教への責務と実際」という題で語った。「教会暦と説教」では、ルター派の伝統を背景に岡崎孝志氏が、日本の教会に余り知られていない教会暦に基づく説教の豊かさを訴えた。福田充男氏は「説教に代わる真理の伝達」で、あえて説教をしないことによって福音を伝えて行く逆説的方法の有効性を説いた。

このように豊かな広がりをもった神学研究会議について、ひとこと付言するならば、「何を、誰に、どのように」に「誰が」を加えるべきであった。神は罪人に救いを伝えて変革をもたらすのに、人をお用いになられるのだから、「誰が」を正面から扱うべきであった。説教を論じるのに、説教者についての考察を欠いてはならなかったのである。しかし、「誰が」を専ら扱うセッションを設けなかった私ども主催者の不明にもかかわらず、大方の全体会議において)

「誰が」が論じられていた。そこに、講演者諸氏の優れた洞察を見るとともに、この会議の真の主催者の憐れみ深い教導を覚えたことである。

この会議のために快く学舎を提供し、「裏方」を務めてくださった中央聖書神学校の北野耕一校長を始め、スタッフの方々、そして講演した上にそれを論文として仕上げてくださいました諸氏に、ここで改めて謝辞を述べることをおゆるしいただきたい。こうした方々の犠牲的な働きのゆえに、「説教」という教会の生死がかかる重要な課題に、165名もの方々（その内、68名はこれからの教会を担う神学生の諸君である）の参加を得て、取り組むことができたのである。

Ⅱ. 閉会礼拝説教：「聖霊の御力によって」 コリント人への手紙第一 2 章 1-5 節

「説教」をテーマにした研究会議の閉会礼拝で説教する。「誰がこの任に耐え得んや」です。示唆に富む講演や質疑応答の時を与えられた後の私たちに、主は何をお語りくださるのででしょうか。私は、パウロの言葉に導かれました。コリント人への手紙第一 2 章の始めの数節です。

まず 1 節の言葉に耳を傾けましょう。「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。」ここでパウロは、自分がコリントに行った時、「すぐれたことばや知恵を用いて、神のあかし／神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした」と書いています。優れた文化を創造したギリシャ。アテネのような中心都市ではなくても、コリントもギリシャのポリスのひとつです。しかも、落日のアテネと違って、この時代、経済的に最も繁栄していたポリスでした。パウロはユダヤ人でありましたが、ヘレニズム時代の学術都市のひとつ、キリキアのタルソで育ちましたから、ギリシャの優れた文化を知らなかったわけではありません。

コリントを訪れる直前のアテネ伝道が、どの程度の成功を収めたかは議論の余地のあるところですが、少なくとも、アゴラで行った哲学者たちとの議論やアレオパゴスの評議所で語った彼の説教が、圧倒的な支持を得たのでないことは明らかです。より素朴な、北方マケドニアのピリピ、テサロニケといったローマの植民都市と違い、誇り高いアカヤ、それもアテネの人々に語ることの難

しさをパウロは痛感していたことでしょう。

しかし、それが主な理由で、様々な知恵を駆使して語ることが方法として有効でない、と述べているのではありません。すぐれたことば、すぐれた知恵を用いなかったのは、むしろ、宣べ伝える内容、「神の奥義」あるいは「神のあかし」に相応しくなかったからです。（ここでパウロは「福音」と言わずに、「神の奥義／神の証」と言っていることに注意しなければなりません！）人間の思いや理解を超えた神の救いの業、神ご自身のメッセージを、どうして被造物に過ぎない人間の言葉や知恵で、説得力のあるものとしなければならないのでしょうか。たとい、すぐれた言葉、すぐれた知恵を用いたとしても。

「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」どうしてすぐれた言葉、すぐれた知恵を用いて宣教をしなかったのか、パウロは続く 2 節で説明しています。あなたがたコリント人の間にあつては、人々に語るべき何かを新たに知ろうと決心しなかった。イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストの他には、何も知るまいと決心した、というのです。十字架につけられたキリストだけを語るために、この方だけを知ろうと決心した、他のことは何も知らないことに決めた、ということです。

そもそも十字架のキリストを語ろうとすれば、どう考えても、すぐれた言葉、すぐれた知恵を用いて語ることはならない。十字架のキリストとすぐれた知恵は両立できない、ということでしょう。1 章（18、23 節）に記されているように、「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚か」であり、「十字架につけられたキリスト」は「異邦人にとっては愚か」ですから、到底人の説明で納得のいくこと、魅力的なことにはなりえないのです。アテネ伝道の経験から、このことを深く心に刻んで、パウロはコリントに赴いたのでした。そして、もうひと言付け加えるなら、多くの優れた言葉、優れた知恵に通じていたからこそ、パウロは何も知らないことにしたのです。

さらにパウロは言葉が続けます。「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。」（3 節）パウロは、何かは分かりませんが、肉体に「とげ」を持っており、持病に悩まされていたと言われています。彼がコリントに行った時、その病のために、肉体的な弱さを覚えていたようです。そのような状態で、大切な使命を果たさなければならない責任の重さに、恐れ

おののいたものと思われます。

福音の内容からしても、知的なギリシャ人には受け入れ難いものであり、福音を伝えるパウロ自身のコンディッションも良い状態でなかったとすれば、パウロの宣教は惨めな結果に終わる、と思うでしょう。ところが、実際は違いました。「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。」(4節) パウロの言葉と宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、神の御霊と御力の現れとなったのです。聖霊の力が表されたのです。聖霊の力強い働きによって、多くの人々が回心に導かれました。言葉巧みに論じることはなかったのに、聖霊の力が現されることになりました。修辞学の知識に頼ったりせず、聖霊の力を信頼し、素朴に十字架の福音を語った結果、神の御力が文字通り表されたのです。

「それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。」(5節) パウロの宣教が知恵の言葉によって行われなかったのが、コリント人の信仰も人間の知恵によらず、神の力にささえられるものとなりました。(ギリシャ語の hina 節は、目的なのか結果なのか、しばしば決めがたい。) 聖霊の力によって説教者パウロが語ったことは、聴衆に信仰を生じさせたばかりでなく、その信仰のあり方を正しく方向付けることになったのです。コリントの信者たちは世俗的で、霊的な成長を必要としていましたが、パウロは、彼らの信仰が人間の知恵にささえられず、神の力にささえられる可能性に期待をかけることが出来ました。

結び

パウロはコリントの人々との間にコミュニケーションとトランスフォーメーションを実現する課題に成功しました。もちろん、継続して実現する必要がありました。だからこそ、この手紙を書いたのです。ここに、この困難な課題を果たすための基本原則があるように思われます。それは何でしょうか。第一に「何を」語るか、ですが、答えはキリストの福音、十字架の福音です。恵みの福音、と言っても良いでしょう。福音ですが、信じない者には愚かと思われる福音です。信じ従う者には苦難を覚悟させる福音です。つまりきであっても、愚かであっても、福音は変わりません。

説教のキリスト中心性については正木氏が語られました。十字架の福音は、私たち自身も苦難に与ることを意味している、とした田中剛二氏の説教「キリストとの共同嗣業」の紹介が、山口氏によってなされていました。

第二、第三のサブテーマ、「誰に」と「どのように」ですが、ここで私たちは説教の逆説的性格を知らされます。私たちは語る対象を知らなければなりません。方法においても様々な工夫が必要です。今見てきたパウロの言葉は一見、様々な努力を否定しているように受け取れますが、実際は違います。パウロはユダヤ人にはユダヤ人にふさわしく、異邦人には異邦人にふさわしくアプローチしました。「何とかして、幾人かでも救うため」「すべての人に、すべてのものとなりました」と言い切るパウロです(1 コリント 9:22)。ピシデヤのアンテオケにおける説教(使徒 13章)とアテネのアレオパゴスでの説教(同 17章)を比べてみれば、一目瞭然です。パウロは神から委ねられた賜物を総動員し、あらゆる努力を傾け、最善を尽くしています。その上で、人間の知恵によらない、御霊の力による宣教を説くのです。

説教者はあらゆる手立てを講じます。しかし、説教は神の御力の現れです。説教が真のコミュニケーションとトランスフォーメーションを生み出すのは、聖霊の御力以外の何ものでもありません。しかも、その御霊は、福音を語る聴衆に対する愛の故に、あらゆる知恵を絞り、あらゆる工夫をするようにと私たちに促します。宣教は逆接的です。神から与えられた一切を用いて最善を尽くしながら、私たち自身の最善に抛り頼まず、神ご自身に抛り頼む。そこに伝達と変革をもたらす説教が実現するのです。

「主よ。キリストの福音、十字架と復活の福音を語るために、あなたの御霊の油注ぎをもって、私たちをお遣わしてください。」

(日本福音キリスト教会連合・前橋キリスト教会牧師)